

国際融合文化学会のモットーと R. H. ブライズ

—2014 年 8 月 1 日夏季例会会長挨拶—

The Motto of the ISHCC and R.H. Blyth :

Opening Address by President UEDA Kuniyoshi at Summer Meeting of ISHCC 2014

上田 邦義

UEDA Kuniyoshi

Abstract: There are two things I should like to emphasize in today's opening address: one is the motto of the ISHCC and the other is that this year is the 50th anniversary of the death of Professor R.H. Blyth (1898-1964). The motto of the ISHCC is to respect, not to compare, all the cultures and civilizations of the world and find harmony within and between them in order to contribute to the happiness and peace of all people in the world. Professor R.H. Blyth is widely known in the world as the writer of *Zen in English Literature* and *HAIKU* (4 Vols.), which spread Zen and Haiku in the world. What must be noticed about him was that he was a perfect pacifist, though he himself may not have mentioned it, as he was a conscientious objector during the World War I which occurred soon after he graduated from high school near London. During the World War II, while he was in an internment camp in Kobe, he published his first book *Zen in English Literature* on Hokuseido Press in Tokyo. Then after the war he published voluminous writings on Haiku and Senryu as well as teaching English at several universities in Tokyo. It must also be remembered that he was a private tutor to Crown Prince Akihito, now Emperor of Japan, for nearly 20 years from 1946 until his death in 1964. He played a great part in the rebirth of Japan as a democracy and peace-loving country after the World War II. Cf. UEDA Kuniyoshi : *Thank You, Professor Blyth* (Sangokan, 2010).

Keywords: R.H. Blyth, conscientious objector, Zen, haiku, Crown Prince Akihito, *Thank You Professor Blyth*.

R.H. ブライズ、良心的徴兵忌避者、禅、俳句、明仁皇太子殿下（今上天皇）、『ブライズ先生、ありがとう』

本日は梅雨明け後の猛暑のなかを、「国際融合文化学会」夏季例会のために熱海までお越しくださいまして誠に有難うございます。今回は初めての熱海駅前「第一ビル」の会場ですが、満席ですね。次回はこのビル内のもっと広い会場をお願いしたいです。

さて、皆様のパフォーマンスや研究発表、御講演に先だちまして、今日は二つのことを申し上げたいのです。強調・力説したいことが二つあります。

一つは、本日初めて参加された方々もいらっしゃいますので、本学会の設立趣旨について、改めてお話しさせていただきたいのです。

そもそも私たちがこの会を始めました目的は、それは大目標なのですが、世界中のすべての文化、すべての民族を尊重し、その「調和」と「融合」をはかりたい、ということであります。「比較」はともすると優劣とか評価をとめない、好ましくないことが多いのです。それで、比較文化ではなく、すべての文化を尊重しその調和もしくは融合をはかりたい。そうして世界中のすべての人の幸福、平和に貢献したい、そういう壮大な目的をモットーに設立された学会ということであります。

そういうことで初めは「調和と融合、文化学会」という命名案もありましたが、少し長いので、「融合文化学会」としたのでした。この提案がなされたのが 1999 年、日本大学通信制大学院の一期生の初会合で、会場は静岡県沼津市の KKR ホテル「はまゆう」でした。そしてその翌日に、近くの旧御用邸で開かれた集会で、会則もほぼ出来上がったのでした。

それを当時の日本大学総長の瀬在幸安先生にお話しして名誉会長をお願いしましたところ、即座に御承諾くださり、さらに「国際」をつけて「国際融合文化学会」と命名された、という訳でありました。ちなみに瀬在先生は、天皇陛下の心臓バイパス手術をなさった天野篤氏の日大医学部での指導教授とのことであります。先進的な研究を大いに奨励して下さった方で、今もお元気にご活躍です。

それで学会は、翌 2000 年に最初の学会誌『融合文化研究』を発刊し、その後会員の皆さんにはほぼ毎年 2 号お送りしてきました。国会図書館やコロンビア大学図書館等にも入っております。ドナルド・キーン(Donald Keene) 先生は名誉会員です。この学会誌は電子版ではどなたでも学会HPから読むことができます。「国際融合文化学会」で検索してください。原則として日本語の文章には英語の要約を、英語の文章には日本語の要約が付けられた国際誌です。

そういう壮大な目的の学会です。最初は日大大学院の院生たちによって設立されたのですが、いまは必ずしもいわゆる研究者でなくとも、どなたでもこの会の趣旨にご賛同下さる方ならご入会いただけるよう、会則も改めてもいいのではと考えております。また会員以外の方でも学会誌にエッセイなり論文なりご投稿いただき、ご入会いただければ大変うれしいです。学会のモットーは、「比較文化」ではなく、世界中のすべての文化の「調和と融合」ということを申し上げました。

さて、本日お話ししたいもう一つのことは、今年 2014 年が、R.H.ブライズ先生(1898-1964)の没後 50 年ということでもあります。ブライズ先生は、日本人が決して忘れてはならない人物です。

私の『ブライズ先生、ありがとう』をお読み下さり、お分かりの方が多くと思いますが、先生は英国人で、今の天皇陛下の皇太子時代に約 20 年間家庭教師を務められた方です。外国では、俳句を世界に広めた方として大変に有名な方です。今は世界の各国語で俳句が書かれていますが、ブライズ (Blyth) の名を知らない人はいくらいます。

そして同時に、ブライズ先生について大変大事なことは、先生は言葉では「私は平和主義者です」とか言われなかったと思いますが、先生の人生について考えますと、先生は徹底した平和主義者で、戦後の日本が民主国家、平和愛好国家となる上で、大変な貢献をなさった方ということでもあります。

私は東京教育大学で 9 年間先生のご講義やゼミに出席させていただきましたので、先生が亡くなられてからいろいろ調べて分かったのですが、先生はロンドン近郊の高校を出てすぐですが、第一次大戦(1914-18)中は兵役につくことを拒否し、刑務所で過ごされた。その間、きつい肉体労働に従事されたということでもあります。ということは、先生は少年のころからすでに「良心的徴兵忌避者^{ちやうへいき ひしや}」であったということでもあります。自らの良心にもとづいて、あらゆる戦争に絶対反対という固い信念をお持ちであった、ということでもあります。「ドイツは英国の敵であっても、私はドイツ人を殺すことはできない」という信念であります。徹底した生命尊重主義であり、非戦主義であります。

第二次大戦、すなわち太平洋戦争中、日本は英国や米国と戦争しました。その前には中国やロシアとも戦争し勝った勝ったと浮かれていたらしいです。中国にとっては、日本との戦争すなわち日清戦争(1894-95)に敗れてからが現代史の始まりということのようです。日本はロシアとも戦争し、日ロ戦争(1904-05)ですが、アメリカの調停によって日本が勝った形になって、日本人は大国ロシアに勝ったと浮かれていたようです。そしてやがて今度はアメリカと戦争するわけですが、この太平洋戦争中、昭和 16 年から 20 年まで、つまり 1941 年から 45 年までですが、ブライズ先生は母国英国に帰らず敵国日本にとどまって一それまでは金沢の四高の英語教師で、その前は朝鮮の京城(ソウル)で英語教師をしておられましたが一神戸の外国民間人収容所に入れられておりました。しかしこの戦争中に *Zen in English Literature* (『英文学のなかの禅』) という英文著書を敵国日本で出版したのです。戦争中に敵国人の英文著書を出版したという勇氣ある出版社は、東京の北星堂書店でした。それは宗教としての禅宗ではなく、「禅」思想や禅精神は、すぐれた東西文化に共通する思想・精神であり、英文学のなかにも多分にあると、情熱を込め、まさに命を懸けて語られた

ものです。

そして戦後、先生は解放されると、昭和 21 年、1946 年に学習院大学の教授に迎えられ、それから約 20 年間、皇太子殿下の家庭教師として、また東京の多くの大学で英文学を講じ、東京そして大磯に住んで、沢山の英文著書を執筆され、日本文化、特に「禅」や俳句を世界にひろめられたのでした。今日の世界各地に見られる禅ブームや俳句ブームはプライズ先生の功績によるところ大であります。アメリカでもヨーロッパでも私はそれを実感したのでした。

「日本人がもっと俳句を愛していたならば、あんな愚かな戦争は起こさなかったであろう」と先生はどなたかに語っておられたそうです。

朝鮮・台湾などを植民地化した日本は、その後中国大陆や太平洋諸国にまで進出侵略しました。どれほど多くの外国人の命を犠牲にし、人権を踏みにじったことか。体験者は帰国してほとんど語りませんでした。そして政府は真実を報道せず、最後まで国民には戦勝を信じ込ませていました。昭和 20 年、1945 年、東京はじめ日本各地は米軍機による大爆撃にあい、8 月に広島と長崎に原爆を投下されて日本はようやく降伏しました。無条件降伏でした。私は国民学校（小学校）の 5 年生でした。誠に誠に悲惨な体験をした日本は、もう絶対に戦争はしない、と世界に宣言しました。憲法を定め、「戦争放棄」をうたったのです。

ところがこうして掲げてきた理想を、最近になって、現実的でないとか、押しつけられたものだとかの理由で、この理想を放棄した現実主義の政権が現れました。世界中の多くの国の多くの人々からうらやましがられ、尊敬されてきたこの理想を、実質的に空文化しようとする政権が出現しました。

国家として国際的に実に恥ずかしいことであります。そして経済のためには武器の生産・輸出もいとわないということです。それを積極的平和主義と称しています。「武士は食わねど高楊枝」の武士の魂を亡くしたものです。もしも政府のみならず、大企業、中小企業、いや国民までもが、経済（お金）のためには戦争（命の犠牲）も辞さない、ということなら実に恐ろしいことです。国民までも、今が少しでも豊かな生活ができれば将来は構わない、などという感覚にまで精神的に墮落してしまったなら、これは実に恐ろしいことです。選挙の度ごとにこのことを痛感します。

事実、政府だけではありません。海外からは、政権だけではなく日本社会全体が、すべて経済中心に動いているとみられているということを、つまり何でも計算づくで、経済的な見通しで活動していると思われることを、今日本人は改めて反省すべきです。戦後の経済的復興そして繁栄の中で日本人が失ってしまった精神性、精神的な豊かさやプライドを、今

こそ取り戻すべきではないでしょうか。物事を決するに、精神的価値を無視し、人類全体の幸福ではなく自らの利益や経済的な見通しによって決するという、経済優先の、精神的レベルの低い発想から脱却すべきではないでしょうか。

ブライズ先生によれば「先生の一番良い生徒」であられた現天皇陛下が、こうした社会の現状をいかに悲しんでおられるか、察するに余りあります。そういうことで止むに止まれず私は『ブライズ先生、ありがとう』という本を数年前に書きました。皆さんには改めてぜひお読みいただきたいです。そして本来持っている日本人の精神性を回復し、世界人類に真に貢献できる日本社会を作っていきたいと念願するのです。

どうも意を尽くせません。拙著『ブライズ先生、ありがとう』も改めてお読みいただければ有難いです。我田引水のようにりましたが、最近の私の切なる願いです。皆様にも是非共鳴いただきたいのです。そして選挙に生かしていただきたいのです。

今日はそういうことで、二つのことについて話させていただきました。「国際融合文化学会」設立の趣旨、そして今年は R.H.ブライズ先生の没後 50 年になる、先生の生涯・ご意志を忘れないでほしい、先生がいかに日本文化を、そして平和国家としての日本を愛されたか、この二点であります。

よろしくお願い致します。ありがとうございます。

(2014 年 8 月 1 日、熱海駅前第一ビル、「国際融合文化学会」夏季例会、会長あいさつ)

写真 2 葉 撮影：梅内千秋



北鎌倉東慶寺

(Received: August 2014)